

学位論文題名

R. M. ヘアの道德哲学

学位論文内容の要旨

イギリスの道德哲学者 R.M.ヘアは個々人の道德的意見、道德的価値観、道德的直観、規範倫理学理論等の、「道德的に実質的なもの」から独立に、道德的判断の妥当性を問うシステムを構築しようとした。それはモラルジレンマや応用倫理的諸問題を合理性の観点から解決する試みでもある。しかしヘアの意図は、こういった問題を解決するための規範倫理学理論を構築することではなく、規範倫理学にコミットせずにメタ倫理学から直接道德的な問題を解決することにあつたと佐藤氏は主張する。つまり佐藤氏は、ヘアが行ったことは、どのような規範倫理的立場をとったとしても、道德的な衝突に対して妥当な結論を導き出すことができるような「論証の形式」を示そうとしたことだと考えている。

さらに佐藤氏によれば、ヘアの道德哲学におけるもう一つの目的は、「いかに生きるべきか」という問題について論じることである。本論文はヘアの道德哲学に関する研究を通して、道德とは何か、なぜ我々は道德的であろうとしなければならないのかといった問いにも答えようとしている。

以下は本論文の内容である。

第Ⅰ部「道德哲学の目的」では、ヘアの道德哲学の全体像とその目的について論じられている。第Ⅱ部「道德的な判断を下すということ」では、ヘアが用いた方法、つまりヘアが個々の規範倫理学理論や道德的意見から中立の態度をとりつつ、いかにしてそれらの間の衝突を調停しようとしたかが述べられている。ここではメタ倫理的な前提として、道德的判断が指令性と普遍化可能性という特性を有していることが手かかりとされている。そしてその前提をもとに、選好功利主義とは妥当な道德的判断に至るための「論証の形式」であることが示される。第Ⅲ部「道德性と合理性」では選好功利主義がなぜ規範的・道德的結論を導出しつつも、個々の道德的意見や規範倫理学理論から中立であるといえるのかが、合理性と優越性という概念を手かかりにして考察されている。最後に第Ⅳ部「道德的に考えること」では教育や応用倫理学などの実践の問題を扱いながら、我々の道德的営みとはどのようなものであるかが示されている。

第Ⅰ部の第1章では、ヘアによる情緒主義批判、記述主義批判、非認知主義批判が検討されている。そしてヘアの道德哲学に於ける目的は様々な道德的直観、規範倫理学的主張、道德的判断の妥当性を合理的に問う方法を見つけ出すことであることが示される。

第Ⅱ部では「特定の慣習や道德的直観に左右されることなく、道德的判断の妥当性を合理的に問うための方法はどのようなものか」という問いへの応答として、「論証の形式」と

しての選好功利主義がその方法であることが論じられる。

第 2 章では特定の規範や道徳的意見にコミットしない中立的なシステムを作るために、その基礎部分にメタ倫理学を据えることの意味が示される。

第 3 章では道徳的判断の「指令性」について論じられている。ヘアによれば、道徳的判断は「指令性」「普遍化可能性」「優越性」という三つの特性を持つ。指令性と普遍化可能性とは価値語一般にとっての必要条件であり、美的判断なども共有する特性である。また道徳的判断の指令性はメタ倫理学上の前提であるから、どのような規範倫理学上の立場に立つ、どのような道徳的判断にも妥当する。

第 4 章では道徳的判断の「普遍化可能性」について論じられている。道徳的判断の普遍化可能性とは、「私が「X はよい」と判断するならば、私は同時に「関連する点で X と似ているすべてのものはよい」という普遍的判断にコミットすることになる」ということを意味する。この性質は言語が持つ論理性のみに依拠した形式的性質であり、特定の道徳的主張にコミットするものではないので、規範倫理学理論に対して中立的である。

第 5 章では指令性と普遍化可能性から選好功利主義が導出される過程が述べられている。普遍化可能性、指令性という論理的制約を通して、道徳的判断は合理的に下されるが、まさにその過程こそが選好功利主義を体現していることが示される。

第Ⅲ部では選好功利主義が、実際に規範倫理学からの中立を保ちつつ道徳的判断を扱う理論たり得ているかどうかを検討されている。

第 6 章では、「選好功利主義は功利主義という規範倫理学理論にコミットする理論である」という批判が扱われる。まず功利主義は歴史的にどのように発展してきたかが概観され、またヘア自身がどのように選好功利主義を採用するに至ったかが考察される。また一般的な功利主義は効用原理に基づくが、ヘアの選好功利主義は実質的で規範的な原理としての効用原理を含まない。したがってヘアの選好功利主義は規範倫理学理論ではないと論じられる。

第 7 章では選好功利主義において用いられている諸前提は規範倫理学理論に対して中立ではないという批判が扱われる。この批判によれば、ヘアがメタ倫理学的主張として述べた、言語にかかわる合理性の制約は、実際には実質的な道徳的価値に基づく制約である。しかし選好功利主義は、それぞれの選好が優越性を持つべきかどうかについて判定するものではない。したがって選好功利主義の規範倫理学理論に対する中立性は守られていると佐藤氏は主張する。

第 8 章では、選好功利主義が依拠する合理性は規範倫理学理論に対して中立ではないという批判に答えている。ヘアが前提している合理性とは整合性であり、それが選好功利主義に規範性を与える。だが合理性によって与えられている規範性は、中立性に抵触するのではないかという批判がある。しかし選好功利主義は効用原理を前提としておらず、そのため選好功利主義に規範性は導入されていないと佐藤氏は主張する。

第 9 章では選好功利主義と道徳性の関係について明らかにするため、ヘアの道徳性の定義について考察されている。ヘアは道徳性を優越性、すなわち他のすべてに優越する地位をもつという特性に見出している。優越性を付与された選好が道徳的な選好であり、そし

て道徳的な選好に基づく判断が道徳的判断である。選好功利主義がもたらす結論の道徳性は、この特定の選好に与えられた優越性から生じている。

第IV部では、ヘアにおける道徳性という問題を論じるために、生きることと道徳の関係が論じられている。ある人が何ものに対しても優越性を与えない場合、道徳哲学は「生を導くもの」という役割を担うことができなくなる。第IV部では、それに対してどう答えるかが論じられている。

第10章では道徳的に考えることの理由と動機付けの問題が中心に論じられ、またそれを通じてヘアの選好功利主義の限界についても明らかにされている。それはヘアの理論が動機付けに関する理論を欠くということである。このような問題について扱うことを通じて、本章ではなぜ我々は道徳的に考えねばならないのかということが論じられている。

第11章ではヘアの理論は、我々の生活においてどのような役割を果たすのかが述べられている。さらに情緒主義との対立についての決着がはかれ、また直観的レベルと批判的レベルとを区別する二層理論について説明されている。そして本章では、二層理論を通じて、選好功利主義と情緒主義とを相補的に用いるという道徳的営みが提唱される。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 藏 田 伸 雄
副 査 教 授 新 田 孝 彦
副 査 教 授 山 田 友 幸

学位論文題名

R. M. ヘアの道徳哲学

本論文はイギリスの道徳哲学者 R.M.ヘアの倫理学についての研究成果をまとめたものであり、A4 版で本文 180 ページ(文献表 7 ページ)、総字数約 21 万字、400 字詰め原稿用紙に換算すると約 610 枚に相当する。

本論文で佐藤氏がとった観点と方法は以下のとおりである。イギリスの哲学者 R.M.ヘアの倫理学については、メタ倫理学理論である前期と、選好功利主義を扱う後期とを分けて論じるのが通例であった。しかし本論文で佐藤氏は、前期と後期とを一貫した立場として捉えることを試みている。またヘアの選好功利主義は規範倫理学理論として扱われることが多かったが、ヘアの選好功利主義は「規範倫理学理論」ではなく、判断の合理性を論じる「規範理論」であり、種々の規範倫理学理論から中立なものであるとされている。さらに佐藤氏はヘアの考える道徳的判断の要素として、従来注目されてきた、「指令性」「普遍化可能性」に加えて、「優越性」の概念に着目している。

次に本論文の内容について簡単にまとめておく。

第 I 部の第 1 章では、ヘアによる情緒主義等の批判が検討されている。第 II 部では選好功利主義が「道徳的判断の妥当性を合理的に問うための方法」であり、そのための「論証の形式」であることが論じられている。第 2 章では特定の規範にコミットしない中立的なシステムを作るために、メタ倫理学を基礎に据えることの意味が示される。第 3 章では道徳的判断の「指令性」について、また第 4 章では道徳的判断の普遍化可能性について論じられている。第 5 章では指令性と普遍化可能性から選好功利主義が導出される過程が述べられている。第 III 部では選好功利主義が、規範倫理学から中立でありつつ道徳的判断を扱う理論たり得ているかどうかを検討されている。第 6 章では「選好功利主義は功利主義という規範倫理学理論にコミットしているので中立的な理論ではない」という批判について、第 7 章では選好功利主義の諸前提が中立ではないという批判、第 8 章では合理性が規範倫理学理論に対して中立ではないという批判に答えている。第 9 章では選好功利主義と道徳性の関係について明らかにされている。第 IV 部では、生きることと道徳の関係が論じられている。第 10 章では道徳的に考えることの理由と動機付けの問題が中心に論じられる。第 11 章では「二層理論」が提唱されている。

以上が本論文の内容であるが、次に規範倫理学及びメタ倫理学理論の分野における本論文の研究成果について述べる。

まず本論文は『道徳の言語』『自由と理性』『道徳的に考えること』といったヘアの主要著作のみならず、*Sorting Out Ethics*等の晩年の著作や論文集、さらに生命倫理に関する論文等のヘアの膨大な著作についても検討を加えている。そのような点で本論文はヘアの道徳哲学に関する本邦で最初の包括的な研究である。また佐藤氏はヘアに対する批判論文についても広く検討し、それらの批判に応えることを試みている。そして後期を含めたヘアの倫理学全般を、合理性概念を軸にメタ倫理学の観点から分析するという方法論は、これまでのヘア倫理学に関する哲学的解釈と一線を画している。今までのヘア解釈では前期はメタ倫理的観点から理解されるものの、後期については規範倫理学としてのみ理解されることが多かったからである。

また本論文の特徴はヘアの選好功利主義における合理性と中立性への注目にある。このような観点からのヘア研究は従来ほとんどなされてこなかった。また従来ヘア研究ではあまり重視されることのなかった要素であった「優越性」に着目していることも注目に値する。本論文はこれによって、ヘアの道徳哲学をより整合的に理解することを可能にしている。また本研究はヘアの倫理学を通して、現代の規範倫理学及びメタ倫理学の見取り図をも描いており、その射程は応用倫理学にまで及ぶものである。この点も本論文の研究成果として高く評価できる。

以上に述べたように、本論文はヘア研究として独創的であるだけでなく、現代倫理学に関する研究論文としても極めて高度な水準にある。ただし本論文でなされている、ヘアの選好功利主義が「規範倫理学」理論ではなく、「規範理論」であるという斬新な主張の論証は十分なのかという点に関して議論の余地がないとは言えない。しかし本論文はヘアの道徳哲学全体の整合的な理解を可能にする、極めて説得力のある解釈を示している。

本論文の審査委員会は本申請論文を慎重に審査し、口頭試問を実施して審議した結果、全員一致で佐藤岳詩氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。